



志度高だより 一飛翔の窓

第111号
(H22.10.8)

♪ 「この時期になると…」

夏が剥がれ落ち空に鱗雲が押し寄せると、何故か物淋しくなる。特別な理由なんてない。それなのに、心の隅っこに涼しい風がすーっとまぎれ込んでくる。やっぱり秋のせいだろうか。

小倉百人一首を拾い読みしても、結構淋しいものが多い。日本人の季節感なんだろう。

〈奥山に 紅葉踏み分け鳴く鹿の 声聞く時ぞ秋はかなしき 猿丸太夫〉

奥山のモミジを踏んで鳴く鹿の声とは？ ブエー？ ブイー？ 奈良公園の鹿はなんかそんな鳴き声だったような気がするが……。でもこれってあまり淋しくないですよ。せめてメーンくらいなら分かるが。とにかく花札にもあるように、モミジと鹿はセットのようです。ところが、古今和歌集の217番にこんなのがあった。

〈秋萩を しがらみふせて 鳴く鹿の 目には見えず 音のさやけき〉

萩と鹿の取り合わせ。悪くはないがマッチングがもう一つだ。

秋といえば月ですね。花鳥風月の代表選手である。

〈月見れば 千々に物こそかなしけれ わが身一つの秋にはあらねど 大江千里〉

月見るとなぜか物悲しくなる。私一人のために秋が来るのではないけれど。うん分かる。今頃の月は煌々と冴えて、射す光が冷ややかで清らかだ。だから皮膚の裏から淋しくなる。万葉人も現代人と変わらぬ気持ちだったとは、彼らを身近に感じますね。

〈白露に 風の吹きしく秋の野は 貫きとめぬ玉ぞ散りける 文屋朝康〉

白露に吹き付ける風。秋の野はまるで糸を通さない真珠が散るようだ。白露と真珠の掛け合わせがうまいが、その頃真珠の首飾りってあったのだろうか。そう言えば、額田王の肖像画に、彼女が真珠か何かの首飾りをしているのを見たことがある。いろんな美人画を見ても、昔の貴婦人はなかなかお洒落だ。

秋はかように淋しいものなのに、これに恋心が加わるとさらに感情の起伏が大きくなる。秋の物悲しさと恋の切なさ。もうダブルパンチでノックアウトだ。冬の句に次のようなのがあった。

〈君がため 惜しからざりし命さへ 長くもがなと思ひけるかな 藤原義孝〉

逢えるなら命も惜しくなかった。それなのに逢ってしまうともっと長くこの先までと思う。分からないでもない。恋心とはそういうものなんだろう。私にも記憶がある。

最後に、秋の訪れを詠んだ名句を一つ。暗唱していて損はない。

〈秋きぬと 目にはさやかに見えねども 風の音にぞおどろかれぬる 藤原敏行 古今和歌集〉

風の音とは、秋の風とも取れるが、風鈴か何かが風に鳴る音と考えた方が情緒がある。



さて、話はとんだ方向に逸れたが、今年みたいな猛暑だと、秋に寄せる想いなんて湧いてこないんじゃないか、そう思った。ところが、曼珠沙華が真っ赤に咲いて、コスモスがちらほら顔を覗かせると、やっぱり秋を感じて心淋しくなる。夏だと汗ばんで、もうクーラーガンガンにきかせて、ミゾレアイスなんかをガリガリ囓る。季節を感じる余裕がないのが本音だろう。「暑いよー。暑いよー」と言って、パンツ一枚でうろうろしているんじゃない、情緒もへったくれもない。ただの中年おやじだ。

今年も秋の京都を訪ねようと思う。京都の秋はことのほか素晴らしい。京都の人達は、モミジのシーズンには全国から観光客がわんさと押し寄せるので家にいるそう。彼らにしてみれば、私たち観光客はさしずめ「おのぼりの物見遊山客」となるのだろう。それでも、京都の秋はひと味違う。どこに行っても秋が落ちている。万葉の昔からモミジと桜は日本人にとって別格なのである。嵐山界隈の天龍寺、常寂光寺、二尊院、祇王寺をはじめ、南禅寺から永観堂、そして哲学の道もいい。隠れ場所的なのは長岡天幡宮界隈から西山。人もぐっと減る。モミジの究極の名勝地吉峯寺に白壁が美しい勝持寺を散策するもよし。車が混雑するが、高尾も格別。神護寺、西明寺に高山寺。散りモミジなら安楽寺に高桐院。濡れ縁から眺めるモミジなら蓮花寺に詩仙堂。ライトアップなら豊臣秀吉ゆかりの高台寺。京都駅近くなら、奈良線で一駅の興福寺。2,000本のモミジが迎えてくれる。通天橋からの眺めは息を呑む。まだまだあります。宇治もいい。石山も見逃せない。時間がないのが残念。とても一秋ではすべてを見られない。死ぬまでに一つ一つかな。

嗚呼、それにしても淋しいの。誰か、心あらば私のこの淋しさを癒してくれないか。食欲の秋。共にみたらし団子を食らおうぞ。